

発表題目：

オンライン空間を構成する文化的規範：
新型コロナウイルス期における日本在住マオリの勉強会を事例に

所属：神戸大学大学院国際文化学研究推進インスティテュート

氏名：土井冬樹

1200 字程度で発表内容を記載してください。

デジタル技術やソーシャル・メディアの発達、文化の画一化を招く可能性も考えられてきたが、その利用方法は民族集団によって異なっていることが明らかにされてきた。本発表では、ニュージーランドの先住民であるマオリを中心に、どのようにオンライン上の空間が「マオリ文化らしいもの」として構築されていくのかを議論する。ただし、本発表で議論の中心とするのは、マオリの中でも日本在住のマオリである。これは、新型コロナウイルスの流行によりニュージーランドでの調査ができなくなったことに加えて、発表者自身が関わっている活動であったため緊急事態宣言後も参与観察が行えたためである。

2018 年に行われた国勢調査によれば、ニュージーランドに居住するマオリは約 77 万人である。外国に居住するマオリの全体像ははっきりしていないが、オーストラリアには約 15 万人、そしてニュージーランドとオーストラリア以外には少なくとも 1 万 5000 人以上のマオリが居住するとされている。本発表では、そのうち、日本に居住するマオリを対象に、かれらが 2020 年の春以降の新型コロナウイルス蔓延の中はじめた、オンラインを通じた活動に注目する。

日本に居住するマオリは、マオリの舞踊グループとしてンガ・ハウ・エ・ファ (Ngā Hau E Whā : 以降「グループ」と記す) を組織している。グループは、2019 年 10 月～2020 年 2 月までは対面で、月 1 回以上、マオリ語や文化、舞踊を練習する会を開催していた。新型コロナウイルスが日本でも流行しはじめた 2020 年 3 月以降、対面での集会は開かれなくなったが、7 月から Zoom を用いた勉強会が開かれるようになった。

本発表では、オンライン空間で、人々がどのようにマオリ文化とされるものと向き合い、それがいかに対面でのものと重なりまた異なっているのかを議論する。1970 年代以降、マオリは先住民運動の過程で文化の再構築を精力的に行った。その結果、マオリの文化的実践に関わる活動を行う際に、あるべき手順や行うべきではないことといった文化的規範が人々に共有され、実践されるようになった。例えば、活動の前に祈り (karakia) を唱えること、何かに参加するときには、顔が見える関係であること (kanohi ki te kanohi : 顔に顔を向けるの意)、相手を知り家族的であること (whaka-whanaungatanga : 家族としての関係構築)、といったものが挙げられる。対面環境で想定されてきたこうした規範は、誰でも参加できるオンライン空間の中でどのように解釈され、持ち込まれているのだろうか。オンラインで勉強会をするという初めての試みの中で、グループはどのように実践可能な規範を取捨選択し、オンライン空間を構築したのだろうか。本発表では、これらの点について考察を加えながら、部分的に、デジタル技術の受容の過程で、文化的規範が取捨選択されていく傾向と、先住民が移住先で可能な文化的実践を行うこととの間の類似点を検討したい。